(7) 幕末の土佐藩

山内容堂

土佐藩の政策　ペリーがやってきて以来、幕府は外様大名からも広く意見を求め、鎖国か開国かで2つの意見にわかれていました。そして、幕府の力は弱くなるばかりです。

このころ、土佐藩の大名は山内容堂（豊信）でした。山内氏は外様大名とはいっても、関ヶ原の戦いで徳川方に味方しており、徳川氏とのつながりもあり、容堂は将軍から信らいされていました。学問を好み、よく時代をみきわめて行動する容堂は、外国との関係が複雑となってきた非常時に、国内での争いには反対し、公家と武家が協力して政治をたてなおそうという公武合体論を藩の方針としました。そして、吉田東洋に命じて政治を行いました。東洋は、藩の借金をへらし、むだを省くとともに、すすんだ産業をとり入れ、砲術を研究して海防に力を入れたり、文武館を建てて教育にも力を入れるなど藩のたてなおしを行いました。

土佐勤王党　江戸や各地で、尊王攘夷（天皇中心の政府をつくり、外国勢力を打ちはらう）運動はさかんになるばかりです。土佐でもくらしにこまる武士がふえ、下級武士を中心に尊王攘夷運動が高まり、薩摩（鹿児島県）、長州（山口県）とともに運動がはげしくなってきました。

武市瑞山（獄中自画像）

こうしたなかで、容堂が安政の大獄で処罰されたことがきっかけとなって、ますます運動がはげしくなり、1861年、武市瑞山（半平太）はなかまを集めて土佐勤王党をつくりました。この勤王党には、坂本龍馬や中岡

慎太郎らをはじめ郷士・庄屋などおもに身分の低い下士たち200人ほどの人が集まっていました。

瑞山をリーダーとする勤王党は、土佐藩の考えを薩摩藩や長州藩といっしょに尊王攘夷の方向にもっていきたいと考え、吉田東洋に話しましたが聞き入れてもらえませんでした。勤王党に入っている人のなかには、土佐藩のやりかたががまんできず、藩をすてて他のところで尊王運動に加わる人もでてきました。そこで、1862年、瑞山は同志に命じて東洋を暗殺しました。そして、京都を中心に、薩摩や長州と同じ行動をとろうと活発な活動を始めましたが、長く続くことなく瑞山らは牢獄につながれ、土佐藩の命令で死刑となりました。

島村衛吉の墓（下島浜）

南国市下島出身の島村衛吉は、土佐勤王堂に属した文武にすぐれた武士でした。衛吉も瑞山らとともに死刑となった一人です。衛吉をたたえる碑とお墓が、前浜下島浜にあります。

坂本龍馬と中岡慎太郎　龍馬は高知の町人郷士の家に、慎太郎は安芸郡北川村の庄屋の家に生まれましたが、二人とも身分の低い武士でした。二人は土佐勤王党のなかまでしたが、藩内でじゅうぶんな活動ができないことを知ると藩をぬけ出し、それぞれの道を歩み始めました。

中岡慎太郎

攘夷論者だった龍馬に、藩のことだけでなく海運や航海術などへと目を大きく開かせたもとは、土佐藩の絵師、河田小龍に出会ったことだといわれています。小龍は、中浜万次郎から外国の様子

や航海術の大切さをくわしく聞いて本に書いたこともありました。そこで、日本よりはるかに進んでいるアメリカやヨーロッパの様子を、江戸から帰ってきていた龍馬に語り続けました。

坂本龍馬

ふたたび江戸に出た龍馬は、幕府の軍艦咸臨丸の艦長としてアメリカへわたった勝海舟の弟子となり、航海術などの学問や実習に取り組みました。このころ薩摩藩の西郷隆盛や長州藩の木戸孝允とも知り合いになりました。

その後、西郷らの世話で長崎に「亀山社中」という日本で初めての会社をつくりました。この会社は貿易会社であるとともに、海運や航海術を学ぶことをねらいとしたもので、後に海援隊となります。この「亀山社中」の大切な仕事は、開国か外国船こうげきかで意見に大きなちがいがあった薩摩藩と長州藩をなかなおりさせることでした。

当時、幕府はもう政治を続けていくだけの力がなくなっていました。そこで、龍馬は1日も早く幕府をたおして、新しい政治を始めないと大変なことになると思っていました。龍馬は慎太郎と協力して、何度も薩摩藩と長州藩に働きかけ、手を結ばせました。そして、1866年、薩長同盟を成立させ、両藩は手をにぎりあって幕府をたおす運動をすすめていきます。

大政奉還と土佐藩　そのころ土佐藩では、板垣退助らの武力で幕府をたおそうとする考えと、後藤象二郎らの話し合いで政権を朝廷に返すという考えと二つにわかれていました。板垣は勤王党に入っていませんでしたが、慎太郎とつきあい、世の中の動きを深く知るようになると、幕府をうつとき薩摩や長州とともに兵を出す準備

もしていました。

脱藩の罪をゆるされた龍馬や慎太郎は、それぞれ海援隊長、陸援隊長に任命され、海と陸両面から軍事・経済面で藩の活動を行っていくことになりました。

後藤は、龍馬のつくった「船中八策」をもとに、武力を使わず政権を朝廷に返そうとしており、板垣も後藤に協力しはじめました。この「船中八策」は、明治になって「五ヶ条の御誓文」のもとになりました。

後藤 象二郎

幕府は、薩摩藩や長州藩の力におされ、山内容堂の助けで、1867年大政奉還（朝廷に政治を行う権利をかえす）を行いました。

大政奉還の数日後、龍馬は京都にある近江屋というかくれ家で、慎太郎と新政府の政策や人物について話し合っている最中、暗殺者におそわれ、二人とも明治維新の前に殺されてしまいました。

「船中八策」をわかりやすく書きなおしたもの

一．幕府は、朝廷に政治をかえしてしまう。すべての命令は、朝廷からだすようにする。

一．議員をおいて、政治の相談をおこなう。公論にしたがって、ものごとをきめることにする。

一．有力な公家、大名をはじめ、多くの人材を、政府の要職につける。かりに身分は高くても、能力のない人間は、しりぞけるべきである。

一．外国とは、国際法にしたがった、正しい交際をひろくおこなう。

一．むかしからつたえられている法律のうち、よいぶぶんはのこし、さらにあたらしい条項をくわえて、こんごの大方針をうちたてる。

一．海援隊を充実させる。

一．首都をまもるために、近衛兵をおく。

一．物価を、外国とくらべて、たかすぎず、やすすぎないようにつりあわせる。

トピック　坂本龍馬

南国インターチェンジ入口より、国道32号線を0.5kmほど北へ走り、旧道を領石方面に入ると、道路右に碑が立っています。ここより約3km入った地、瓶岩才谷地区に、坂本家初代の太郎五郎の墓があります。

坂本龍馬先塋の地

坂本家は、4代八兵衛のとき（1661年ごろ）、高知城下へ移り住み、本丁筋3丁目で質屋業、酒造業を始め、出世しました。その後6代目の八郎兵衛の長男が郷士の職を買い、本丁筋1丁目に分かれました。この3代のちに坂本龍馬が誕生したのです。

坂本家のふるさと・才谷には、才谷龍馬公園があり、龍馬の像もかざられています。

坂本家初代太郎五郎の墓

坂本家家系図

才谷龍馬公園